枯尾花

天

911.3
カ
天

芭蕉翁饗事記

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今年乾坤衰なりと歎き
世若孤獨貧窮なりて德業なきを
と年星霜なり二十餘人の門徒を
ひとり年合住むる因と緣との不可思
議ひとも動搖なりなり　天和二
年の春深川の草庵急なりかてなし
澎湃ひとり皆をうつして歸のうつて
まよひなん是をむの法のうつるを初

めとなる形如火宅の變を慨り無所
住の心を發して其次の年春の末
甲斐の根年くくして高士の高踏
つしなるしかとなるしより三更月下入
無我といひしん昔の詩を立帰なをし
るしをくくしくして焼亦の舊竹と
屋をむすひ志そしも心ひとする詠
ひとりの芭蕉を植て雨中吟

老在世を引て世をすてゝ
住まゝ堪閑のなぐさけくらして
をつゝ芭蕉とゝふことゝなる
出ぬるの法圓覺寺大巓和尚より
易くゝしくおしへゝ
行ゝ或時翁ゝ卦のやうみんとて
三月時日を古暦のなをして逆卦ゝ
ゝ萃とゝふ卦ゝあゝ是を一

ゝの花の風ゝ吹き雨ゝ降ては
ゝまゝ陰和ゝ花けく成ゝ
つゝ成ゝ命
ゝ成ゝ世ゝあゝ
ゝ花をあゝ
潛なんゝ
ゝつゝ
や信ゝ聖典の瑞を感ゝ
ゝ門ゝ

侍るなれとも叶ふまし附合もしかし所
けしきは橋あり舟あり林あり塔ありなとの
雲隠もなく上から渚まうと眼前の奇
景も猶ちくたのしみをせめて和歌にも
むつかしく侍れとも古へより聊恐をもて
さあなとて貞享初のとし秋 知利
たとへもなし大和路やすみ圓て
心のこす汲家とくして読よみくるしき也

あはれなるや昔より人の口すさみ茶の
知識ひとのあはれなんいふあしき者や
あらまほしと風雅してはそのときの名
隔なく鄙の者までいふる人に名を
も白きを思ふこと安くる所はかえしくも隠れ
信ける方を行脚に似ける所と風の
吟行に徳化して三風の師と仰
き侍るも近在隣郷より馬はなれて

ありむかしもやんことなしとのにあれと
名ふ一日も形くるれは心気いつしくは
衰減して病者となり田におちて旅ねに
ともしみなん其事より大津膳所の人々と
はなはた深く幻住庵猿蓑ニ記アリ義仲寺
抑く所至る処の風景を心の物として
遊へりて年あり元来混本寺仏頂和尚
に嗣法していともり禅の法師といへれ

一気鉄鋳生ナスいきほひあつかれも先身
もほそまゝに父母のうへにいたる迄も
自然に出家集の骨髄をとられける
ゑらくやされそこそ世ゝの杜子美と
こそそせしして貧交人に厚く喫茶の会
盟に旅ては家臨の添藤も数のひと
のとにまて自由躰放任狂只悟にて
につくしせしも現力之れ第一世の知なる

風雅の世をうしひ月をかき詠
流を尋てひらかへる波戸の松浦
潟波島の跡を枝をうしなはしもなく
きはもとよ雄国本号波の兼好法
師の言葉を寂蓮法師の縁に京祇
宗長白川の道載の道信いつれもく
故人なこの道尋ねてよほひとし
みえいとやうとさそそんの事も

自然の事を詠ぶ十論命
ちなとをそなへる法華
まる所をいはみをそ我胸の中を祖
神のさいはのことを伝れしを伝
法を悪魔のうちやむ悪魔を悪魔
尚のうしの世をのふ詠のてくき花
ゆめの中もゆめをつくるみとも
なひしよおとしをてはをを

人ゝ[illegible]ものゝ[illegible]て[illegible]も[illegible]ゝ[illegible]に[illegible]伝あり
[illegible]ものも[illegible]移神[illegible]ものゝ[illegible]
九月[illegible]日[illegible]所の曲[illegible]
[illegible]所[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
の皆と[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ伊賀山の紙帳[illegible]
蘭の現積[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ御の茅[illegible]

生と稱よくしてそうとなれし生涯
をうろんし四ひもまひつる海川の行を
みるもうとし学や筆数を尤をい
人も注をとうるもなりしら心はする
かくとかくかしこのすとしてうひ
侍加るのたにてをうをの三の明の記
言をてををしの用ふをとうひふを
ゆあうん人をみをやとはのあう
人をのひうにてをもみを筆にる侍あり
ををひのもをを移神ををみ
九月十四日膳所の曲翠ふうをを
ら所をををを城なしを妙
の皆とゆへをもを法のををををれ
をあをを伊賀山の紙帳をあをを
蘭の堤積ををををををををを
けををを御の菜をををををを

七月晦の夜、[illegible]池前度
[illegible]けて物いふ力もなく手足氷の如
あるやうにて伏つまる人々の中も去る
京より祐[illegible]の賜所より三条大津
より東海道乙川より中三河の国つき渡て
なを[illegible]惟[illegible]たる[illegible]る節[illegible]
[illegible]伝[illegible]心神散乱なるも
[illegible]不淨[illegible]て人を近[illegible]招

この事[illegible]所より河[illegible]伝へ伝へ[illegible]
[illegible]令運[illegible]行る[illegible]
[illegible]心弱[illegible]
[illegible]病て[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

賀會　祈禱乃ち

法つきやうらよりあり　神集め　水節

風のこゝろとすや　三宅の野　去来

思う法よ行の林やみそさし　惟孝

初夏よやうてよりん　佐太宮　正秀

神の留る　教ヤや　老のこゝろ　之道

五月いさみつゝ　ゆくの白　伽香

話ゝ　老もしき　湯浴　支考

水仙や　使ふつれて　床　彩色　春舟

峠こ沢暗のさなるや　法きはし　丈艸

日よ陽て　乙ふ沢　新こ　嘉弟　乙刑

見そ生子の　笑詠　之本節　芳　死之

もゝこのこゝ　さし　ゆも　書こ　ゝ

湾を　恥ぬ　も　堅郎　のゝ　ゝ

春舟と　舎四羅　こゝ　い　之道　ゝ

なのゝ　切よ　心ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

門人ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

嶋こ沒時のさなりや法華ひ丈仲
日ゑ陸て乃こ沒義こ意義第乙刑
見そ生涯の笑納めこ本節り茅と死と
もさるこ卜さ孔多も書こんこ
湾を恥ぬも聖卧のこすけと形ら
呑舟と金羅こ孔いこ道ら穴ゑて
なのり切ゑ心さを孔ら一るあて俗
門人なも他ら孔ともして介抱俗

府城の端といふまでもなくまいくらもあるまいと
乙刑よりの使ひ来たるよりなりと思ひ出
らるるまでもやうて舟たて急て
むらひ手ぶり形あらひぬ手を宮前
亀石ひとつふるよりはけの清水を
堺よりまると十一百の夕八方はよ着て仏
心なくおきれのり出発来なしとそう
よりはじをかくるやうおそれとは明

こしのふもとのはらも縁にふきて帰るよ
つらぬきつらねしは悦ひなからもなくいのちよ
なりけるなりけりんよりおもてとりける也
なれかさうひとへ麻の衣の袖つまよりたるを帳
ことよりまきぬる脱かもし秋のよひの露
今ハれとて錦繍のめくらきをもとの衣
なるそ門跡の宗のより西国のある九日
十日ハ下れくるしれ出て其角和泉の

府中の輪といふところくまいりくるなりを
乙列よつ路のまかれるにならつしと思ひ出
らふるをのよそとしやうてみたてなんて
むかひ気色しほるめしぬ寺を出泊
亀山ひとつふるにふけぬの涼しさに流を
堺よりつきまるも十一日の夕へ大坂よ着ては
んなりちきれの折来鶯来東なしとてゆり
よつ路なりしをかくなやをおもひしといふる胞

まもなくゆつを退いて安眠のうちとやすめるなり
勝をゆるめて病顔をみるにいよいよ危
なりて知死期も定めなくなりぬる
吹井のうの露と招ん時なる音ず
と彩はなしてなるまあり之教む推の
ふもあるとゆかし　幼住菴にうよ世を遠
ぶ曽殿と堀をなるもてとまし毋りを毋
なのうち句なるもとも其ぶさ沈の

ちたまふとうけつけて病床よりいでいと
いとんとなき懐をのべ力なき声の泪と
かたるにこそ今こうの深志の通じて
住吉の神の引とるやうやと給ふわ
のごとくそも形つるるかくまでとも
おとしいる蟻通の明神の物となるも
みるかぐ涙ぐるいとく泪をあけも
つくるうたをとるあるかるつる

まひくゆつる退いて妙味のんとやすめなり
勝をゆるめて病顔をみるいよいよ
つるて知死期も定めなるけしきなる
吹井のうの歌と招うん時なる音子
と形なりてたるまあかりいと教む推の
ふもあるとゆかし　幼住菴ゆるよ遠
本曽殿と塩をたるるとてとまとしあり
なのうう白ゆあるそ其ゆさるの

おとひ[illegible]和伊も[illegible]しかとうり正秀
[illegible]て[illegible]和伊也 市郎
皆[illegible]みのもり[illegible]乙州

十二日申の刻[illegible]死[illegible]
睡[illegible]物[illegible]和[illegible]
[illegible]槽[illegible]用[illegible]
[illegible]乙州[illegible]中[illegible]
惟[illegible]正秀 市郎 吾舟[illegible]

[illegible]月の[illegible]と[illegible]へ[illegible]るよ[illegible]みて[illegible]と[illegible]に常[illegible]
きなるものあるとこの書と思へたらはるよ
[illegible]の[illegible]もの[illegible]と[illegible]れ[illegible]
[illegible]
やうて所[illegible]
うつくしまる[illegible]
病中の[illegible]
[illegible]
[illegible]

大仲
吉兵
惟[illegible]
[illegible]

おとひ[illegible]
[illegible]
皆[illegible]
十二日申[illegible]
睡[illegible]
[illegible]
[illegible]
惟[illegible]正[illegible]

[illegible]
[illegible]
乙州
[illegible]
[illegible]
[illegible]
乙州
[illegible]
[illegible]
[illegible]

弟とも子十人袖寒さを嫌ふ
そもあれ、角ひろてを所をたりなく
家孫をつくまで世稀名ひとくを
ふるは世なるあり、汨むつすなる
都をかさみて能活の出をしるし
世をそ思ひたのつ人の名世を慕ふ
昔語をくさくさつ東南西北招
の所をつるの栖を定めさるあのをや

奥松島越の白山をぬきてそくを
あるは世の一と都をはるの歌なん
つ所もそひて加るの風をいふを
東をを四方なあをの門人の思ひを
をやとるるの為法を加へて休見
世くしみくう義仲をるして華
礼義信を正し京大津服所の恵
応拙発拙をも世をの情を慕

[illegible]
百家人と淨衣をのみ智月と乙刀を書
ぬひ給へ善せまいらせ則義仲寺の
道愚上人をみちびきまして門弟のみ
引入る所へかとのてゝ赤土塚の右
なる所にて土をおかうるつゝみ
さる柳もありうゝてゝ墓のちきりをん
ちのまゝ卵塔とやのひあり垣を

[illegible]
次常に風景をこのみ癖あるもの
所なるなるゝ山田上山をあまくてさ
ちあるまゝ色潤出る舟も飲食の砂を
のこし撫物の庵田家の雁遺骨と御
この月のてゝ次とかるあなゝぬ首
なるゝ七日ゝ祝こゝるとてのゝおとな
追善無物幸ひあ百年こゝと

人のなげきを感じて思ひ給へ給
事の証を残し侍るべきはかりに
のつてこの詞を書たのもん書給
回向の為にと次第し

於栗津義仲寺牌位下　晋子書

元禄七年十月十八日　於義仲寺
追善之誹諧　晋子

なきがらを笠に隠すや枯尾花
温石さめて皆ぬる夜の友
此灯の影まもるむら山や丈竹
やとりあるこの国の編笠
惟然
つみ捨し京の古木の七経　李節
洗ふやうな夕立乃雨　李由
木枯のこゑとのがれぬる月の影　之道

地うけの茶の因縁結び　玄朱
あの高田中のあをとをとこ　曲翠
藤くゝ　結く　行　後　て　て　正美
暁　落　よ　し　む　ぬ　月　の　初　四　臥高
風　の　く　す　を　ち　く　ら　の　む　泥迄
ろ　ひ　な　と　秋　の　至　高　を　世　伝　す　乙刈
お　戸　を　と　人　を　流　る　あ　や　屋　芝柏
遊　す　ら　ひ　菖　蒲　又　白　ま　ま　氣　石　昌房
車　の　流　を　ま　ま　し　し　こ　ろ　探芝

二

浮月の描く流をぬよ　川　胡故
貫くゝ下て居あ坊する　物去
笹の葉をいめ　秋の雨　游刀
ぬ　人　ろ　お　流　の　蘇葉
世　高　よ　集　の　貴　の　情　す　知月
多四維の茅　を　と　て　貴　居　舟
ぬ　ま　も　ま　く　ん　ま　る　筑　紫　信　土　芳
手　出　る　刀　い　何　信　る　阜　袋
四　十　を　お　な　る　も　卿　な　く　い　夫　椿

若なる姫きみ　野童
一おとして　まつもこゑを　ふるとき　素舞
ものの　ふるまひ　ゆかしき　酒　万里
河風の　おとしのぶ　ゆかしあり　誠
菊よ　あまつて　花　ちる　品　這華
塩壺の　ちらぬる　池の　同　許六
月の　ひかり　ちかき　紙　田鳬
秋も　ゆ　波　ふるまひ　ふるまひて　荒雀
ちらぬる　迄　ちらし　鶴　楚江

小屏風の　ひかり　ふるまひ　ふるまひ　礼し　野明
四ツ　ふるまひ　ふるまひ　ふるまひ　風国
移　ふるまひ　草鞋　ふるまひ　ふるまひ　木枝
女人堂　ふるまひ　法　ふるまひ　ふるまひ　哥子
ひかり　ふるまひ　清　ふるまひ　ふるまひ　角上
ふるまひ　哥　ふるまひ　ふるまひ　之道
ふるまひ　ふるまひ　ふるまひ　ふるまひ　ふるまひ　去来
椀　ふるまひ　ふるまひ　ふるまひ　ふるまひ　土芳
ふるまひ　ふるまひ　ふるまひ　ふるまひ　ふるまひ　芝柏

ぬしんとまてて出ぬ人のこゝろあ　卧高
ぎるまてて物人のこゝろまいてもる　尚白
月さしかゝる門のみの垣離　昌房
新の家造まくらくるゝ加へ　舟野
ぬしらの新たゝまりるまて　丈竹
花まてるまとしまるまる詠　惟然
者ゝ弾くいぬるものり　美椿
小橋端ふつるあ近る隣の上　正秀
流清く出る川へまる石　国皂

日ゝまるて家の古ぬらゝ　朴吹
ぬれの橋のゝゝれて　角上
里ゝ下やとしへ遠き家の寺　泥豆
やみやゝ川刻む音　尚白
ちゝらのまるも出ぬ毎ゝ　阜斎
二ゝまはいて囲ゝの掛　芝柏
内ゝ家ゝ月むまゝのゝゝ　探芝
ゝゝゝ出て刺ゝる道　游刀
け半ゝ三ゝゝれて月ゝて　楚江

あるよりの地元なりて魚光
社堂立帝十帝立ちるし晋子
所ちとて化ものと敬風國
三ウ
赤潮と水上地を引けて支考
乳母を傳く送る嘯望正秀
柳ちるの柳のめはる昼下り丈艸
雨氣の雲たやくし昌房
生所ち蕗師の蕗を抜て臥高
浮町出る浪白秋田之通

ちるきしの仕名ちるき昏の雲去来
水緑ちて傳ちるとのち泥豆
ちるちるむちて斗白ちて尚白
ちるのちやちかちる月卓袋
連や雲ちして秋の一ち角上
澄ちもちちの雲牡丹
かちちと花ちん人ちるしちて土芳
名
村ちおちる伊勢諧の種芝柏
暗ちなれい小鮒のちを加減這幸

軍を[illegible]を祖[illegible]の物　卧高
淵を[illegible]と陸地のを[illegible]　晉子
[illegible]日[illegible]きて会陳揮[illegible]　正秀
実人の[illegible]　[illegible]　支考
[illegible]して替ぬ大小の額　[illegible]
味[illegible]　[illegible]力とあ[illegible]　楚石
[illegible]　[illegible]　游刀
[illegible]　[illegible]　同國
[illegible]　[illegible]　之道

白鳥の険を菅原に持せ　探芝
之河[illegible]天下一番　去東
飯[illegible]　[illegible]　尚白
卯[illegible]　[illegible]　田鬼
[illegible]　[illegible]　芝稻
文庫をとおろし　猫山　[illegible]　土芳
[illegible]　[illegible]　惟然
[illegible]　[illegible]　丈艸
[illegible]　[illegible]　北玄

墓ところ十万なき世のしくれかな　也探之

枕席に湿るゝや秋の雨　大津楚江

かなしさの花のまゝや草の露　伊田露芳

本意柳や木の葉ふりつくし塚の上　大津成と

日影さへ塚よしくれや流るゝと　同虚白

月影に古き錦みや鏡の郷　涌那

老け鶯に似て見えあふ法の詠哉　大当

ことも翁の跡にしたはれし角に羽黒をとめて
人々の一周忌に墓書をとふらひたすらうき
ものゝおもひをよせたるはむかしも人ゝ
思ひの花のあまりむなしきかたをとゝめて泣

きくこともと同じ泪や子の露　京瀬士

なく子なるの中にも露に色もなし　湖角と

涙そゝの外にけてさん墓の露　宗野童

一むかしの涙やさめん鴫の床　同風国

身によまる色のさつれや夕時雨　伊勢長芳

悲しさもおもふもしくる時雨代　同泉哉

秋さへ似たし涙々かまの雁の声　大坂呑

石角て墓も苔の露哉　同芝柏

冴の道も夕て拵かき神無月　涌茶

入月や比の数まての郭公　京 春沂

十六夜の月を如柏亭にあそひて翁のかくれ所といへる椎の本をこゝろさしいまそうしろくる時を思ひ

木のもとや何とかよふくるすそ　曲翠

猿おて木葉ふたつゝむあはれは　正秀

ころしとひきまつきくる幸は　臥高

猿ちてつんをの岩にかゝる芸之　泥芝

のん送りし庵の姿や袖の雪　霊椿

おかわしも何あ嵐の木葉かは　青子

気つかん涙も悲し枯柳　洛 野明

線香の煙り瘡ふや枯芭蕉　同 荒雀

袖めての千鳥も啼や塚の塚　大坂 春舟

香芭蕉衣まきけて泪のあ　ぜゝ 忠兄

立のをかて袖とむるや墓のあ　同 回鳧

悔あるて歎ふりうなきとる　同 游刀

菊折てはな薩し霜晩山　同 朴吹

木もさまのゆめよなしさ時雨　大つ 木枝

冬の夜独泪をとかすかたたれは　ぜゝ 這萃

[illegible]の時[illegible]けう土の恋　大津土竜
[illegible]ふ[illegible]　[illegible]　同伴た
[illegible]　加や女
[illegible]

二七日廟参之悼句所之通

[illegible]　岩石
[illegible]　尺草
[illegible]　大海梯
[illegible]　[illegible]

同[illegible]
松[illegible]
[illegible]

同吾我
同松泉
同翁巫
坐[illegible]
同童氏
[illegible]
廿万里
素[illegible]
廿河南

秋の月襟かけたる洞ヶ那　　徹底

くさつけも宿も湯とぬれけり　　麻之

木曾の月も浪のしくれかな　　砂之

力なく墓にみよや時雨哉　　蚤鳥

秋の柳かれてもなほそよぎけり　　向震郷

枝折て今日の菊よりや作の宿　　さの素几

思ひ寄らでつても子のしくれかな　　小倉何多

紅葉みる者が枝やもて檮かな　　さが露有

力なき柳のあらきや秋の牡丹　　長根堂

鈴虫やおちこちみしらせん跡　　文如行

宿もなき時雨の松の瀬も鳥　　興田作

くらつけてに小鳩てのみやと
嫌はれ作法侍るらん

大根引あらいつくすあと殿れ　　京芳木

三七日伽加賀連流追悼句

時雨るるやおくてもゆかぬ松のかやと　　いか之虎

帰るみの子吹よくくる檮かな　　山岸柴東

出て見る壺ものうき枝やまな　　湊井風睡

宿さらや散て仏の膝の掃　　嵩雪堂

さゞみさへ啼て飛ゆく浮寝鴨　杉枝 配力

六つ五つまつ人ほさかへる秋の月　昇其 萍蘇

桑摘や閏のおよ菜の花　讃岐や 秋雨

咲かゝら庵のつけ縁を消ん　京や 一次

なのき沢や鴫立てさへる魂塚　佐浜 旧本

日向い何おもかう菊畠　西浜 白日

浅や草しさかれぬ玉川縁　備前 尾陀

桃の花のきらへたらぬ影かな　岸 偏和

山茶花の散りたえまでさかな　梅 栽幸

借兼つる飛鳥もあらん花ぽれ　大坂や 万年

うろまく身の果や木曽の咲とまり　猿雖

芭蕉くち残る袖のしぐれかな　山風 麦

山寺の小たぼけ浮むなまこ哉　楢 霜蜂

一生を旅の仕舞のしぐれかな　井手や 為醉

菓のうし桃葉陽の名のこつ　流 武之

何ゆもなくて生めがりの竈　史 標帯

菊も此て側に小松も消ぬらん　小童 七年

身はよる也風しかくさ枯柳　中 荻子

桂ろ乃花火やら男花なか　名竹木

笹さら治鳴るあつらし中曲　其くや　正實

その寸ま修をもゆしれなか　守直彰

出とりてるし落くら山まし　大保仙秋

読くその糸らなすつや立花水　松本米固

わるろ乃土きて人の水や源の果　内神九郎

なを見くの毛御本堂とまして
亡師の筆書よい出り

前なる水や治まち女すまめ村衛　いか半残

手向さん花の本をの咲袖の下　西嶋百歳

限ありいさそらや散る花ふ　満乃

はらくと闇り水やと落るの卯　来川鳥泉

四七日手向けて普音無道之句

猜きの此袖の上水や打出嵐　伊世孫州

前乃あともみの通りして秋の海　同園女

清くておもともぬみく鳴の秋　同一寄

信をなし東ねすきし月起なる　同宗比

みて治や墓の像も高石ね　同斗従

思ひなき世まくむて手業かな　同岸木

昭和學園
短大
第6364号
受入
昭36.3.14

上ノ終

岩坂不
日庵坂
尾州熱
同素堂
同尤次
元吉
大坂俳者
水低耳
伊賀山